

## 唯一無二の景色

西部中・2 鈴木 結奈

毎週日曜日、私はいつも嫌になる。決して、次の日が月曜日で学校に行かなければいけないからではない。私が嫌なのは、山に登らなければいけないからだ。つまり、大切な休日に、自分の体力を削ってまで山に登らなければいけないのが嫌なのだ。

朝は遅い。ほぼ昼に起きて、ご飯を食べて家を出発する。そして、午後二時くらいに目的地へ着く。ここまではいいんだ、ここまではそのあとが嫌なんだ。いくら払ってもついてくる虫、自分を熱中症にさせてやろうといわんばかりの太陽、背中から全身へ圧力をかける荷物。うんざりする。こんなに嫌な思いをしても、私は山に登らなければいけない。今までもできていたんだから、できないわけがない。そう自分に言い聞かせ、この日は本宮山に登った。

思い起こせば、私の両親は、私が生まれる前から山に登っていて、私も幼いときから一緒に山に登っている。よっぽど山が好きなのか、毎月一度は必ず山に登っていた。簡単な山も難しい山も。そのときは私は山が好きだった。山に登っていると、

「まだ小さいのにすごい。」  
「すっごく元気だね。」

と褒めてくれる人がいたから、私は褒められるのがうれしくて、高い山に登っては優越感に浸っていた。

しかし、二〇二〇年あたりになって、新型コロナウイルス感染拡大防止という理由で山には行けなくなった。その間に私は小学二年生から小学六年生になり体も大きくなったため、コロナ禍がおさまったあとに山に登っても、誰も私を褒めてくれなかった。前よりも山に登っていなかったから体力も落ちたし、両親は体力が落ち始め

ているため、私にも大人並みに思い荷物を持たせるようになった。私はそれでも褒めてもらいたくて両親より早く登ったり、両親より大きい荷物を持ったりした。しかし、私は見誤ってしまったらしい。私は思っている以上に体力がなく、思っている以上に行動力がない人だったのだ。私は結局何も努力しないまま一人心の中に深い傷がついたように心が痛くなった。悪いのは自分なのに。

そんなことを考えていたら、よく登る山である本宮山を登り終えていた。今日の登山はよく登っている山だからなのか、それとも別の理由があるからなのかわからないけれど、早く登り早く下山できたような気がした。

七月二十四日、この日がやってきてしまった。今回は薬師岳という富山県と長野県の境にある山に、テントで一泊する予定らしい。正直言ってあまり行きたくなかったが、両親は楽しみにしていた。どうしてそんなに山を楽しいと思えるのか分からない。けれど、これはずっと前から決まっていたことだし、直前で断ったら荷物の量が変わって両親をづらい気持ちにさせてしまう。そう考えると、私もづらい気持ちになってしまうため、断るわけにはいかない。

今回は朝三時に出発するらしい。なんせ車を走らせて五時間。そこから山を登り今日の目的地まで六時間を予定している。山へ向かっている車の中で、今日私はどれほどつらい思いをするのか考えてしまい、おなかと頭が痛くなっていた。やがて車が止まり登山口に着いた。いつのまにか太陽が出ていて暑い。かなり高い場所にいるからか、雲が近く見える気がする。車の後ろに積んだ靴を履こうと外へ出ると、ハチやアブのような虫が多くいた。これを見たときに、私は虫酸が走った。見ていて鳥肌が立ち、とても嫌な気分になった。

そんな場所から離れたくて、すぐに山に入り登っていった。けれど、虫はずっと私たちの近くをブンブンと羽音を立てながらぐるぐると飛んでいる。ただでさえ山に登ることがつらいというのに、もう少し静かに飛んでほしいと思った。しばらく虫の羽音を聞きなが

ら歩いてみると、目の前がひらけて岩場に着いた。白い岩だからか、日光の照り返しがひどくまぶしい。早くこの岩場を抜きたいと思っただ。

どれだけの時間がたったか分からないが、今日の目的地の宿に着いた。そこからテント場までは歩いて二十分かかった。さっとテントを立てて寝転んだ。だが、とても暑かった。それはそうだ。なぜなら今は午後二時で太陽が真上にくるため、テントの中はオーブンのような状態になって、危うく熱中症になりそうだった。そんな状態の場所で寝たりご飯を食べたりしていたら、その日の夜とても頭が痛くなった。頭が痛くて起きたのか頭が痛くなる前に起きたのか分からなかった。とてもつらく激しい痛みで、十分ほど一人で耐えていたが、我慢の限界になり隣で寝ていた母を起こした。母はとても心配してくれて、痛み止めの薬をもらい飲んだ。しかし、痛みは治まらなかつたため二個目を飲んだ。しばらくして私は眠ってしまったらしい。

次に私が起きたのは早朝四時。外はまだ暗い。私の頭痛は治まっていた。準備を済ませて登り始めると昨日よりも調子がよく先頭に立って前を歩いていた。登り始めてすぐに川の音が聞こえた。川の近くは涼しかったが、まだ登り始めてすぐで体が温まっていなかったため、寒いと感じた。少し歩くと大きな岩がある場所に着いた。

このときには、空の色が青く見えるくらいに明るくなっていた。自分の目で山頂が見えるほどになったときには、山が光に照らされているのを見たが、光が当たっていない私たちの歩いている場所はまだ寒かった。登り続けていると、太陽と目が合った。とても寒かったが、太陽のおかげで体が温かくなっていくのを感じた。その後小さな石がじゃらじゃら転がっている、石以外は何もない道をひたすら歩いて一時間ほどようやく山頂についた。太陽はいつもより輝き周りの山を照らしていた。早朝にしか見られない澄んだ青色をまとう空。これはおそらくこの山でしか味わえない景色だ。このとき

私はこの世界でいちばん幸せなのではないかと思った。そのときの達成感は、今までの疲れもなくなるほどのものだった。太陽は出ていたが、とても涼しかった。甘い菓子パンを朝食として食べた。朝食を済ませてテント場へ向かった。下山するときは重力が味方してくれているようでとても楽しい時間だった。

車のある場所まで下山しようと荷物を持ったとき、今日の荷物は昨日より重い気がした。聞くと今日の元気な私の様子を見て、両親が荷物を増やしたらしい。楽をして帰りがかった私としてはとても迷惑であったが、昨日の夜両親に迷惑をかけたので、そのまま黙って下山をした。

六時間くらいかけて下山をして車に戻ってこられた。私でも大人と同じくらいの荷物を持って登ることができたこと、とても長い時間をかけて薬師岳という大きな山に登ることができたことが、私を晴れやかな気持ちにさせた。虫はいかかわらず羽音を立てながら私の周りを飛んでいたが、あまり気にならなかった。

帰り道、私はどうして山に行くメリットは少ないのに山に登ってしまうのか考えた。私は今まで両親の期待に応えたいと思っているからだと考えていた。しかし、今回山に登って本当の理由に気づけた気がする。初めて大人の両親と同じくらい重い荷物を持って山に登り、山頂からの景色を見たとき、私の努力を認められたように思えたのだ。私は山を好きになることはないかもしれないが、山はいつもひそかに私の心の支えになっている。